

「担い手としての関係人口」創出への越境学習の効果

ー長野県塩尻市の事例にみる新たな創出アプローチの検証ー

中島 ゆき

大正大学 地域構想研究所 主任研究員

(要旨) 本研究は、関係人口に関する議論が活発化する中、関係人口が地域再生の主体者となることを期待する場合とそうでない場合とで政策的に一線を画す必要性があることを前提とし、関係人口が地域再生の主体（以下、「担い手としての関係人口」という）になるプロセスに焦点を当てた。具体的には、個人の主体性を促すと言われている越境学習環境を独自の方法で組み込んだプロジェクト「塩尻市のCx0Lab」を調査し、その効果を観察した。調査の結果、プロジェクト参加者の64.5%が単なる参加から「担い手としての関係人口」へと変化した。また、そのうちの80.0%に越境学習の効果と言われている3つの要素（①視野拡大 ②チャレンジ精神 ③主体性）と④自己成長意欲という共通因子がみられたが、①②だけでは不十分であること、この複数の因子が組み合わさることが必要であることがわかった。

キーワード：関係人口、主体形成、担い手としての関係人口、越境学習、質的比較分析(QCA)

1. はじめに

(1) 課題の背景

「関係人口」に関する研究はまだ新しい。地域とさまざまな形での関わりを持つ人たちを「関係人口」として定義しているが、地域との関わりや度合いや関係人口側のニーズによって、関係人口になるまでのプロセスは異なる。そのため、各自治体が一概に関係人口創出事業として課題に向き合っても、ターゲットが広すぎて有効的な解決策が見いだし難いとも言われてきている。これまでの研究調査から「関係人口は漠然とした議論になりがちだ」（中島, 2022）、「定義があいまい」（田中, 2021, P63～）という指摘がされてきた。

昨今、この問題への対応として、地域側が自地域に合った関係人口を再定義する必要性が高まっている。一方で、新しい概念である「関係人口」

に対して、どのように再定義すればいいのか模索中の自治体も少なくなく、これまでも現場での試行錯誤が散見されている¹。

そもそも関係人口が地方創生で登場してきた背景には人口減少と地域での担い手不足が挙げられる。それゆえ、地域側は何らか具体的に貢献してくれることに期待していた背景は大きいと言える。対して関係人口側は、ちょっと違った体験や軽い参加の関係から、移住も視野に入れた深い関係まで、求める関係の深さがさまざまである。それ故に、双方のミスマッチを防ぐためにも、地域側は自分たちが考える関係人口を明確に定義し、関係の濃淡によって政策面での目標設定の違いを明確にする必要性が出てきている。

こうした関係人口政策をめぐる現状において、本論で論じるのは「担い手としての関係人口」である。これは、該当地域に居住していないものの

¹ 具体的には、中島(2021)では、アンケート調査から「取り組みの成果、効果が明確でない」「目標を数値設定するのが困難」

といった現場の声が上がっている。

地域の課題や地域に足りないものがあつた時に自分のスキルや知見、労力を提供し、地域を実践的に応援する人たちと定義するものである。

以下の記述が具体的な事象として当てはまる。「例えば、あるイベントがあつたとして、交流人口はおもてなしをされに来る人たち（イベント参加者）のことを指している。観光客がその多くで、それはそれで大事であるが、一方で、一緒にテントを建ててくれたり、最後の片づけまでやってくれたり、力になってくれる人たちも大事で、人口が減少している地域にとっては観光客と同じように必要な人たちである。その人たちは、「困っています」という言葉に反応してくれる。このように①行ったことがある、②買ったことがある、③住んだことがある、を超えた関係が築ければ地域にとって関係人口が担い手としての関係人口になる。」（大谷, 2019 より抜粋）

(2) 本論の位置づけ

「担い手としての関係人口」はどのようなプロセスで創出されるのか。筆者はそのプロセスを探求するため、2023年に長野県塩尻市の関係人口創出事業である「塩尻 Cx0Lab」（以下、Cx0Lab）に実際に参加し、プロジェクトの企画立案から参加者募集、活動開始までの過程を追った。同活動の事例報告として最初に寄稿発表したのが「担い手としての関係人口創出の新しいしくみ ―当事者意識を生み出す「仕様書」／塩尻市の事例―」（中島, 2023）である。本論は、この事例報告の後に新たにアンケート調査を実施し、その結果と論稿を加えた同調査の続編である。

(3) 前調査の概要

調査対象である Cx0Lab は、塩尻市の地域プレイヤーと関係人口が協働で地域課題の解決や魅力の再発見を目指すコミュニティ活動である。この活動の特徴は、関係人口が地域課題解決のために地域プレイヤーと一緒に「仕様書」を作成していくことである。その工程では、1泊2日の現地視察とその後、週1～2回程度のオンライン MTG が1ヶ月程度続く。先の事例報告では、この「仕様書」の作成工程において、関係人口は地域課題を自分

事化し、最終的に自分自身が地域で何かができるのではないかという当事者意識を育てている様子を観察している。同報告では、この工程を「担い手としての関係人口」創出のプロセスとして越境学習環境にあると考察している。特に、越境学習の3要素（①異質性 ②抽象性 ③上下関係のなさ）は主体性を促すとされている。Cx0Lab の取り組みにおいては、この越境学習環境が「仕様書」作成の過程に組み込まれ、参加者の主体性が発揮された様子が見られた。

(4) 本論の目的

本研究は「担い手としての関係人口」創出のプロセスに、越境学習環境の効果があることを検証することを目指す。これにより、政策的に有効な手法を明らかにし、各地域の「関係人口創出」事業における明確な目的設定の促進、地域に適した人材の集結と人材対流の増加を目指す。

地域と関係人口の双方のニーズがマッチした人材対流が促進されることは、地域にも関係人口にも双方が幸せな生活を築くことにつながる。例えば、関係人口から「私が私らしく暮らせるまちは、ここだった」という言葉を聞くことが度々ある。ここに関係人口創出事業の質的な成果があると考える。本研究は、市民が官民一体となって地域を創造していくプロセスに貢献し、関係人口創出事業の効果の最大化及び地方創生に寄与することを目的としている。

2. 調査対象と方法

(1) Cx0Lab の特徴と調査選定の理由

筆者が参与観察した Cx0Lab は 2023年7月の活動であり、これは同プロジェクトの4回目となる。過去3回の活動で比較的継続的な「担い手としての関係人口」を41人創出し、また、時々顔をだす「担い手」としては102人創出している。他での類似調査がないため数値としての正確な比較はできないが、同 Lab の「担い手としての関係人口創出」の割合が高いと考えられたことが選定理由である。そして、もし創出割合が高い場合、同 Lab にあって他の地域にないものが「担い手としての

関係人口創出」のカギを握るという事になる。そのカギとして筆者が着目したのが、仕様書の存在である。同 Lab が作り出す仕様書の特性、さらに仕様書の何が関係人口を深く地域と関わらせるのかを探索したのが、前調査である。(詳しくは中島, 2023)

(2) 前調査からみられた越境学習とその効果

本調査は前調査でみられた越境学習の効果を検証するものであるが、主題の前に越境学習が何か、その効果として既存研究で明らかにされていることには何があるかについて述べる。

越境学習とは、石山 (2018) によると個人の居心地の良い「ホーム」(日常) と慣れない場所「アウェイ」へと短期間で行き来する学習のことを指す。また、アウェイの環境条件の特徴は「上下関係のなさ×異質性×抽象性」であるとしている。ホームとは個人にとって居心地のよい慣れた場所である。ホームには以心伝心で通じるよく知ったメンバーが存在するが、同時に刺激のない場所でもある。他方、アウェイとは、個人にとって慣れない場所である。時として居心地が悪い場合もある。アウェイの場は、通常は公式の組織ではないことが多く、公式の上司がいるわけではない。したがって、自分への指示はない(上下関係のなさ)。また、多様で異質な人との協働が中心となる(異質性)。さらに、アウェイの場は組織目標やミッションが最初から決定されていることは少なく、それを自分たちで考えることになる(抽象性)というものだ。

そして、石山 (2018) はこれらの環境条件が次の効果を生み出しているという。「異質性」は多様で異質な人々と交流する能力の向上、「抽象性」は試行錯誤や失敗を恐れず挑戦してみる姿勢の向上、「上下関係のなさ」は個人の主体的なリーダーシップの発揮につながる。

(3) CxOLab の越境学習環境

CxOLab の環境がこの3つの越境学習環境にどのよう当てはまるかを示す。

a) 異質性

CxOLab に参加するメンバーは、そもそも異なる

経験やスキルを持つメンバーが参加しており、最初の1泊2日の現地視察で初めて顔を合わせたというメンバーが多く、異質性が高いと言える。参与観察を行った CxOLab の第4期は、合計21人の関係人口が参加者であり、そのうち今回が初めて塩尻市にかかわるといふ新たな関係人口は13人で、お互いの関係はまったくない。それ以外の8人は、何度目かの関わり者であった。

現地視察の後は、チームに分かれて週1~2程度、多い時で週3のペースでオンラインで集まり、アイデアや意見を出し合う。この時、メンバーが日常働いている業界や経歴によって、使う言葉の意図が違ったり、MTGの進め方の常識がなかったりといった場面が登場する。その都度、意識合わせが必要になっている。これは、越境学習で指摘されている「アウェイ」そのものであり、異質性の特徴を持っていた。

b) 抽象性

抽象性については、CxOLab で最終的に参加者が仕上げることになる「仕様書」作成の工程が当てはまる。実際の工程は、地域プレイヤーが提示した課題(テーマ)に対して、1ヶ月間かけて関係人口と一緒に「仕様書」をつくるというのが最終ゴールである。その「仕様書」のフォーマットは(図1)である。基本構成は、「0. テーマの概要/1. テーマ選定の背景/2. 実現したい未来・本プロジェクトの目的/3. テーマに関してすでに取り組んできたこと起きている問題・解決すべき課題/4. 本プロジェクトで外部人材の力を借りたいこと、勘案いただきたい条件」である。この構成は、特別特徴的という訳ではなく、一般的な仕様書に記載すべき内容である。特徴的なのは、このテーマの解決策の方向性も目標設定など、決まっているものが何もないという点である。特に、「2. 実現したい未来・本プロジェクトの目的」については、テーマを提示している地域プレイヤー自体が明確に形になっていない場合も多い。むしろ、ここが明確になっていないからこそ、「一緒に作ること」に意味が生まれてくるのだと考えられる。メンバーは、漠然としている実現したい未来や本プロジェクトの目的を具体化するために、あらゆる角度で疑問や仮説を提示する。それに対して、地域プ

レイヤーが想起する当初のプロジェクトイメージと合致するかどうか、何が問題なのかなどを細かく確認していくというのが仕様書作成で多く使われている時間だ。

テーマ名
テーマオーナー 団体名・個人名

0. テーマの概要

1. テーマ選定の経緯
写真なども活用しながら、各エリアの現状などについて第三者が分かるように記載

2. 実現したい未来・本プロジェクトの目的
実現したい未来をありありと描いてください。

3. テーマに関してすでに取り組んできたことと起きている問題・解決すべき課題
実現したい未来を目指すうえで現状起きている問題、解決すべき課題を設定してください。また、これまでの取組についてもまとめましょう。

4. 本プロジェクトで外部人材の力を借りたいこと、調査いただきたい条件

■何を調査して、どのレベルまで外部人材の力を借りて成し遂げたいのか。

■目指す具体的な成果や、制約条件は何か？
予算
関係者

(以下は副業人材を採用する場合に記入)
<募集要項> ※以下参考例

- テーマオーナー ※団体・個人名
- 募集職種
- 応募資格 ※求める人物像
- 勤務形態 原則リモート
- 勤務時間 業務委託契約 (連委任契約)
月16時間程度 (連4時間程度)
定例オンラインミーティングを2週間に1回 (1時間~2時間ほど)、それ以外に関しては原則Slack等を利用した情報共有だけならば、拘束時間は発生しません。
- 契約期間 3ヶ月 (2021年11月から2022年1月まで) × 10月から業務開始も可。
- 報酬 プロジェクト全体で最大3ヶ月15万円 (30,000円~50,000円 (月額)) (現地までの交通費及び宿泊費含む)
- 採用人数 1~2名

5. 今回のプロジェクトを覚えていただくための発表資料

URLで記載

図-1 仕様書のフォーマット

この「仕様書」作りの工程は、「アウェイの場合は組織目標やミッションが最初から決定されていることは少なく、それを自分たちで考えることになる」と石山 (2018) のいう越境学習の環境条件である抽象性と完全一致している。

c) 上下関係のなさ

Cx0Lab チームでは、地域でテーマを設定した地域プレイヤーがいる他、Cx0Lab の複数回参加者か運営組織のメンバーが1人ファシリテーターとして役割がふられている。ファシリテーターはCx0Lab の過去の参加者であり、当日の参加メンバーでもありつつ司会進行の役割も果たす。地域プレイヤーは塩尻市での課題をテーマとして提示し、それに対して自分自身が中心となって解決に取り組むというコミットメントをしている。そこには特に上下関係が存在せず、誰かが決定権を持ったり、特定のメンバーが主導権を握るといったことはない。最終的にあるのは、みんなが考えた課題解決方法が地域プレイヤーが望む方向性であり、実

現可能なことであり、望む未来であるか、ということだけである。なぜなら、課題解決の際に実際にその活動を現地で中心でひっぱる人がいなければ絵に描いた餅になってしまうからである。

以上のように、誰かが指示を出したり、同時に指示待ちする人がいない環境であり、これは越境学習の環境条件である上限関係のなさとは完全一致している。

(4) アンケート調査の概要

a) 実施概要

- ・調査実施期間：2023年11月29日~12月18日
- ・調査対象：長野県塩尻市の関係人口創出事業「Cx0Lab」他、地域活動への参加経験者
- ・アンケート依頼数：推計200名
- ・回収方法：HPやSNS、個別メールで依頼、回答はWEBフォームにて
- ・回答数：83名 (うち、Cx0Lab 参加経験者32名のみを抜粋)

b) 回収方法について

これまでに塩尻市の何らかのプロジェクトに参加したことがある人を対象に「塩尻市プロジェクトに関するアンケート調査」として回答依頼をした。回答者には、塩尻市で参加したプロジェクトを聞いており、「Cx0Lab」へ参加ありと回答した人のみを抽出して分析を行った。

(5) 調査の内容

塩尻市と関りを持ったきっかけ、現地での過ごし方、関りが強くなった理由、今後の希望する関わり方、応援方法など、7項目32設問を実施。途中、「Cx0Lab」へ参加ありと回答した人のみ、以下の詳細項目 (表-1) を質問した。

表-1 「Cx0Lab」へ参加ありと回答した人の調査内容

設問項目	回答選択肢
参加状況	現地でのキックオフ・クリティカルシンキング研修/1泊2日の現地視察/仕様書作成までのオンラインMTG(1ヶ月間)/Slackでの意見交換(仕様書完成までの1ヶ月間)/中間発表会/最終発表会/別テーマへの参加
全般的な満足度	10段階評価

塩尻 Cx0Lab の参加で 1) 期待していたこと 2) 得られたと思うこと	普通の旅行と違った体験ができそう／普通の旅行では行けない場所へ行けそう／知らない土地を訪問できるワクワク感／自分が成長できそう／自分のスキル、自分を活かそう／新しい経験やスキルを得られそう／新しい人との出会いを求めて社会貢献ができそう／将来的な副業への足掛かりになりそう／将来的な移住のための準備ができそう／その他／期待していたことは特にな
参加して 1) 印象的だった出来事 2) 最も印象的だった出来事	初めて会う人が多いのに、かなり深い話をしたこと／チェックイン、チェックアウトという方法 オンラインで共有される自己紹介の方法／自分が参加する理由、内面を見つめる機会となったこと／地域課題が難しい／塩尻のまちづくりが先進的 塩尻は課題が多い／プロジェクトの進め方が上手／最終ゴールが見えない／発表までの時間が短すぎる／副業人材を採用すること／地域プレイヤーの頑張りや思い／議論の進め方(みんなの意見を出し、集約するなど)が上手い／チームメンバーの経歴・スキルが多様／MTG を進めるためのツールが最新／その他
塩尻 Cx0Lab の1ヶ月間の変化について	MTG で自分の意見や思いを伝える事ができた／MTG で他人の意見や思いを聞くことができた／さまざまなアイデアから自分の考えが創発された／自分がゴール設定に参加できるのが楽しかった／ゴールが見えなくて不安だった／まずは、何でもチャレンジしようと思えた／チームメンバーの経歴が多様で刺激になった／チームメンバーの経歴が多様すぎてまとまりにくかった／みんなの意見を引き出そうと思った／議論の拡散と収束を意識していた／積極的に議題を提示した／MTG 内で、自ら何らかの役割を担った／プロジェクトの進め方が学びになった／ファシリテートや Lab メンバーは地域活動のロールモデルであった／議論の拡散が激しくて、まとまらなかった／議論の収束がうまくいった
1ヶ月間の思い	楽しかった／学びが多かった／新しい友だちがたくさんできた／自信が持てるようになった／視野が広がった／自分でも役に立てることがあったという喜びがあった／自分がやりたいことの方向性を確認することができた／自分の強みや特性を認識・発見することが出来た
自分自身の成長にどの程度の影響があったか	とても影響があった／やや影響があつ／どちらともいえない／あまり影響はなかった／全く影響はなかった
今後の関わり意欲について	何らかのプロジェクトを立ち上げてみたい／プロジェクトを運営する側にまわってみたい／プロジェクトに関わり、積極的に主催者や運営をサポートしたい／可能な範囲でプロジェクトに関わりたい／プロジェクト次第に関わりたい
プロジェクトへ関わる、関わらないを選ぶ基準	自分の興味・関心の分野のプロジェクトであるかどうか／地域貢献・社会貢献できるかどうか／自分が何か役に立てそうかどうか／面白そうかどうか／参加メンバーの前のめり具合／実現可能そうかどうか／予算がある

かどうか／副業など、仕事につながりそうかどうか／プロジェクトの運営メンバーの魅力／その他

(6) 変数の設定と分析手法

a) 目的変数(担い手として)の設定

表1の設定の中から、今後の関わり意欲について具体的な行動を示す「何らかのプロジェクトを立ち上げてみたい」という設問に対して、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した人を「担い手としての関係人口」として捉えた。

b) 説明変数(越境学習の効果)の設定

本調査では、先行研究で明らかにされている越境学習効果が Cx0Lab で効いているかどうかを検証するものである。留意点として、先行研究の石山(2018)調査では社外活動と自身の業務とが関連してどう影響を与えているかという調査方法であるのに対し、本調査はあくまで社外活動上だけで自身の影響を測ることが限界であるということである。そのため、石山(2018)で示された「リーダー的立場での能力開発」(同, P169~)の調査内容を十分に精査し Cx0Lab の活動に解釈しなおした。なぜなら、最終的にリーダー的立場で本当に行動に移すとなった場合、業務としての立ち位置と関係せざるを得ないという違いがあるからだ。この点を考慮して、以下の概念で越境学習の効果として説明変数を設定した。

- ・視野拡大の効果:「異質性」は多様で異質な人々と交流することで、受け容れることも理解することも難しい異質な視点からの意見に、真摯に向き合い自分の中に取り込んでいくことで新しい視点を獲得するきっかけとなることから、「視野拡大」という効果のカテゴリーで表す。
- ・チャレンジ精神醸成の効果:「抽象性」は「目標の設定が明確になされているとは限らない不確実な状況も存在するであろう。そのような曖昧性への対処として、応用性が高い能力」(同, P180 抜粋)であり、試行錯誤や失敗を恐れず挑戦してみる姿勢の向上につながるとされていることから、「チャレンジ精神」という効果のカテゴリーで表す。
- ・主体性発揮の効果:「上下関係のなさ」は多くの

役割がメンバーによって自発的に分担される環境であり、これは個人の主体性が発揮されリーダーシップにつながることから、「主体性」という効果のカテゴリーで表す。

c) 説明変数(個人の資質)の設定

上記3つのカテゴリーは越境学習という外的環境からくる能力向上効果である。一方で、越境学習というアウェイ環境を素直に自身の成長のためのプラスに受け入れて、積極的に自らが成長しようという意欲も必要である。これは環境とは別の学習意欲であるため、個人の資質として「自己成長意欲」というカテゴリーを加えた。

d) 分析方法

前述の変数を用いてクロス集計した。但し、本調査はCxOLabへの参加という特定の少数事例(サンプル数が31)を対象としているため、 χ^2 乗検定は適していないことから、母集団200人でサンプル数31、信頼水準95%の許容誤差16%の範囲で結果が変わらないことを確認して最終的な考察のための分析とした。また、自由回答記述の発話も併せることで、抽出した変数がCxOLabの特徴とその効果を表していることを示した。(第3章)

次に、サンプル数が少ない時に有効な質的比較分析(QCA)²を採用し、結果が「担い手としての関係人口」であるために、複数の条件がどのように寄与するかの分析を行った。(第4章)

3. 調査結果

今回の調査では、CxOLabに参加した人の64.5%が「担い手としての関係人口」であるという結果であった(図-2)。以下、「担い手としての関係人口」64.4%(20人)と、それを除外した「参加関係人口」35.5%(11人)でそれぞれクロス集計し越境学習の効果の違いをみる。

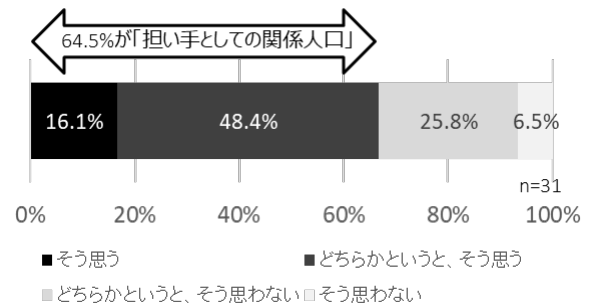


図-2 担い手として関係人口の割合(「プロジェクトを立ち上げてみたい」という設問に対する回答)

(1) 視野拡大の効果

視野拡大の効果に対しては、設問「さまざまなアイデアから自分の考えが創発された」「チームメンバーの経歴が多彩で刺激になった」の2つを説明変数として設定した。クロス集計の結果は図-3である。図をみやすくするために横棒グラフの回答結果は、「あてはまる」と回答した割合のみを掲出している。「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」は割愛した(以下、図-3~5同)

「さまざまなアイデアから自分の考えが創発された」という設問に対し、「あてはまる」と回答したのは「担い手としての関係人口」が45.0%、参加関係人口は9.1%で35.9ポイントの差であった。「チームメンバーの経歴が多彩で刺激になった」については10.5ポイントの差であり、本設問では差はみられなかった。

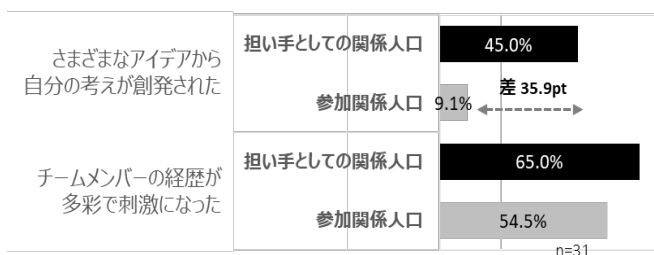


図-3 「視野拡大」の効果

² 質的比較分析(qualitative comparative analysis: QCA)は、複数のケースを比較し、異なる条件の組み合わせがどのように特定の結果を引き起こすかを明らかにする研究手法であり、このアプローチは得にサンプルサイズが小さく複雑な因果関係を持つ研究に有用とされている。限られたケースの中で条件の組み合わせがどのように結果に影響を与えるかを理解

するのに役立つ。特に単一条件の影響ではなく、複数条件の相互作用を解析する際に有効とされている。

QCAにはいくつかの手法があるが、本調査ではブール代数を用いて条件の論理的な組み合わせを分析し、「担い手としての関係人口」になる結果に強い影響を与える条件を識別した。

異質性に触れたことで視野が広がったことを示唆する参加者の代表的な発言を以下に示す。

「自分の課題を多角的に議論するために必要な人たちが揃っていた。」(回答者 No.2)

「スキルや経験が豊富な人が積極的に参加していたこと」(回答者 No.78)

(2) チャレンジ精神の効果

チャレンジ精神の効果に対しては、設問「自分がゴール設定に参加できるのが楽しかった」「何にでもチャレンジしようと思えた」の2つを説明変数として設定した。クロス集計の結果は図-4である。

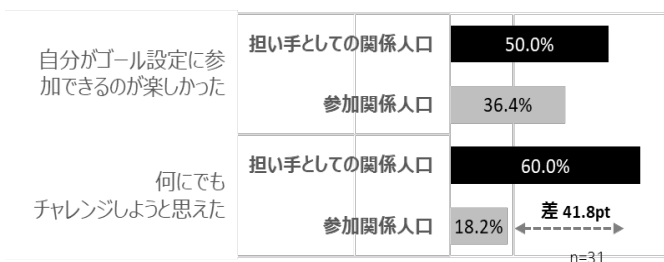


図-4 「チャレンジ精神」の効果

「自分がゴール設定に参加できるのが楽しかった」という設問に対して、「あてはまる」と回答したのは「担い手としての関係人口」が50.0%、参加関係人口は36.4%で差はみとめられなかった。

「何にでもチャレンジしようと思えた」は「担い手としての関係人口」が60.0%、参加関係人口は18.2%で41.8ポイントの差であった。

抽象性に触れたことでチャレンジ精神がでたことを示唆する参加者の代表的な発言を以下に示す。

「地域課題に触れること、そして自分以外の人々のそれに対する解決方法やアクションを知れた。何でもまずはやってみようと思った」(回答者 No. 28)

「課題を議論する場合、色々な障壁はあるが、そもそも議論自体がすんなりいくようであれば課題自体も課題になっていないと思うので、障壁もありながらも意見を言い合い、一旦の結論や方向性を決めながら、いろいろやるのが重要と感じた。」(発言者 No. 61)

(3) 主体性の効果

主体性の効果に対しては、設問「みんなの意見を引き出そうとした」と「積極的に議題を提示した」の2つを説明変数として設定した。クロス集計の結果は図-5である。



図-5 「主体性」の効果

「みんなの意見を引き出そうとした」という設問に対し、「あてはまる」と回答したのは「担い手としての関係人口」が45.0%、参加関係人口は0%で45.0ポイントの差であった。「積極的に議題を提示した」という設問に対し、「あてはまる」と回答したのは「担い手としての関係人口」が25.0%、参加関係人口は0%で25.0ポイントの差であった。

上下関係のない環境下で自主性がでてきたことを示唆する参加者の代表的な発言を以下に示す。

「仕様書作りを進めるうちに自らプロジェクト参画したい思いが醸成された。」(回答者 No. 44)

「自分のスキルはできるだけ提供しようと思いました」(回答者 No. 56)

(4) 自己成長意欲の有無

参加者の自己成長意欲の有無に対しては、設問「プロジェクトの進め方が学びになった」「ファシリテートやLabメンバーは地域活動のロールモデルであった」の2つを説明変数として設定した。クロス集計の結果は図-6である。

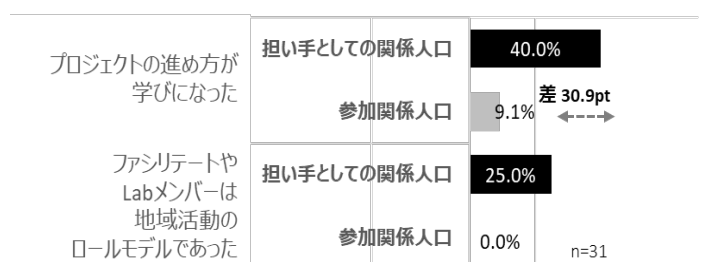


図-6 「自己成長意欲」の有無

「プロジェクトの進め方が学びになった」という設問に対して、「あてはまる」と回答したのは「担い手としての関係人口」が 40.0%、参加関係人口は 9.1%で 30.9 ポイントの差であった。

「ファシリテートや Lab メンバーは地域活動のロールモデルであった」については、25.0 ポイントの差であった。いずれも越境学習と言うアウェイの環境でありながらも積極的に学ぶ姿勢として捉えた。参加者の代表的な発言を以下に示す。

「普段、人と話してもいても自分が考えていることを話す機会はなかなか持てない中、そういう環境に身を置く事で言語化できたことは楽しい」(回答者 No. 2)

「深く考える中で一度壊して再構築するようなプロセスがあるから。すごく思考が深まった。」(回答者 No.63)

4. 「担い手としての関係人口」創出に影響を与える変数(質的比較分析)

表-2 のデータ行列は、どのような条件(前述の説明変数)を持つと「担い手としての関係人口」になる可能性が高まるのかという、全体像を示している。

変数が 4 つある場合の組み合わせケースは全部で 16 通りになるが、そのケース番号を「ケース No」として列 1 に示した。列 2～5 は前述の変数 1～4 の設問それぞれに対して、「あてはまる」「ややあてはまる」が「1」、そうでない場合は「0」で表している。

列 6 はこのパターンで回答した回答者 No. の番号を列記、列 7 はこのパターンで適合した人が何人いるかを示し(=適合事例数)、列 8 はケースに適合した事例数のうち「担い手としての関係人口」である場合の数を結果として記載している(表-2)。

今回、全 16 通りあるうちの、1、2、3、7、11、14、16 の 7 ケースが掲出された(表-2 の列 1)。

最も多かったのはケース No 1 で、適合事例数 14、整合性は(結果が「1」である割合) 0.64 であった。すなわち、全参加者 31 人のうち、14 人がケース No1 (全ての変数が「1」) に該当し、その内

の 9 人が「担い手としての関係人口」であったことを示す。

次いで多かったのがケース No3 (4 変数のうち 3. 主体性のみ「0」で、それ以外が「1」) で、事例数が 7、整合性は 0.71 であった。

表-2 データ行列

列1	列2	列3	列4	列5	列6	列7	列8	列9
ケース No	1 視野拡大	2 チャレンジ精神	3 主体性	4 自己成長意欲	適合回答者No (※)	適合事例数	結果が「1」:担い手としての関係人口の数	整合性
1	1	1	1	1	<u>1, 4, 5, 6, 7, 10, 11, 12, 13</u> , 2, 3, 9, 23, 24	14	9	0.64
2	1	1	1	0	<u>8, 14</u> , 25	3	2	0.67
3	1	1	0	1	<u>15, 17, 18, 26, 30</u> , 16, 27	7	5	0.71
4	1	1	0	0	—	—	—	—
5	1	0	1	1	—	—	—	—
6	1	0	1	0	—	—	—	—
7	1	0	0	1	19	1	0	0.00
8	1	0	0	0	—	—	—	—
9	0	1	1	1	—	—	—	—
10	0	1	1	0	—	—	—	—
11	0	1	0	1	<u>20, 21</u>	2	1	0.50
12	0	1	0	0	—	—	—	—
13	0	0	1	1	—	—	—	—
14	0	0	1	0	<u>28, 31</u>	2	2	1.00
15	0	0	0	1	—	—	—	—
16	0	0	0	0	<u>29, 22</u>	2	1	0.50

※結果が「1」すなわち「担い手としての関係人口」であった回答者Noを太文字下線している。

次いで多かったのがケース No2 で (4 変数のうち 4. 自己成長意欲のみ「0」で、それ以外が「1」) で、事例数が 3、整合性は 0.67 であった。

質的比較分析は少数事例の複雑な関係性を分析できる方法として使われているが、特に多変量解析と同じような処理が可能な点もメリットとして挙げられる。すなわち、このケースがどの程度説明可能なかを数値で評価できるという事だ。

今回の調査では、表-2 の最終列の「整合性」がそれにあたる。田村 (2015, P142) によると、0.80 以上でほとんど常に十分、0.65 以上で通常は十分、0.5 以上で半分以上は十分としている。今回の結果からは、ケース No3 が最も高い整合性が見られ、0.71 で通常は十分のレベルであった。

このデータ行列が意味するところを概念図として表したのが図-7である。

「塩尻Cx0Lab」参加者31人のうち、20人(64.5%)が「担い手としての関係人口」となった。そして、その20人のうち80%(16人)が越境学習の3つの効果と1つの個人資質が共通でみられた。特に越境学習効果で強くみられたのは、視野拡大とチャレンジ精神であるが、ケースとして適合性が高いのはこの2つの変数に自己成長意欲が加わった時であるという解釈ができる。

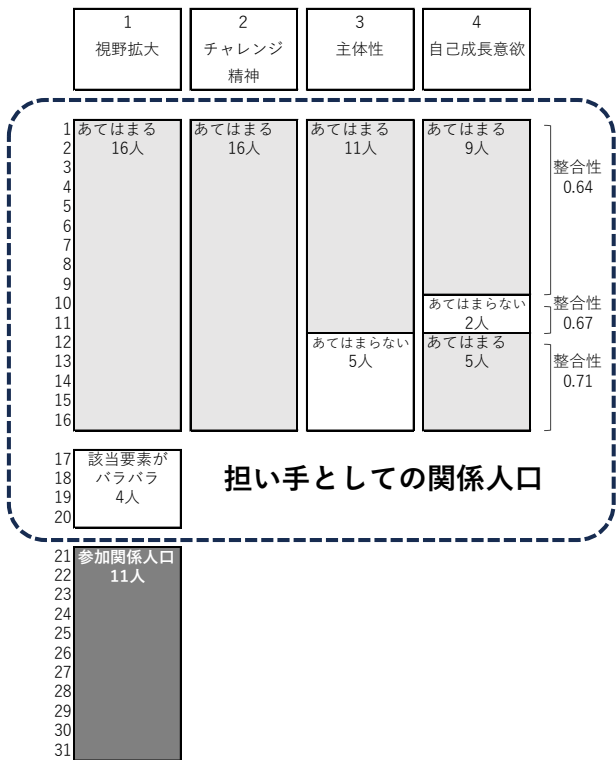


図-7 「塩尻 Cx0Lab」参加者の「担い手としての関係人口」創出状態とそれぞれの共通要素

5. 考察

以上の結果から、越境学習環境を組み込んでい
る Cx0Lab には「担い手としての関係人口」創出に
影響を与えている以下の共通要素があることがみ
えてきた。

(1) 視野拡大とチャレンジ精神の効果

視野を広げ、チャレンジ精神を養うことが、関
係人口の担い手創出において肝要であることがみ
えてきた。異なる環境や考え方の人たちとの交流

は、参加者に新たな視点を提供し、未知の挑戦に
対する積極性を促す。しかしながら、これら2つ
の要素だけで「担い手としての関係人口」が決定
されるわけではない。実は、この2つの変数のみ
で分析した場合は、「担い手としての関係人口」と
「参加の関係人口」との間で整合性の割合が変わ
らない。すなわち、これら2つの変数だけでは、
担い手として関係人口になるかどうかは決まらな
い。しかしながら、この2つの変数両方に「あて
はまる」と回答した参加者が87%いることを考え
ると、視野拡大とチャレンジ精神発揮の効果は
Cx0Lab の特徴であるということはいえる。

(2) 自己成長意欲

視野拡大やチャレンジ精神と共に、自己成長へ
の強い意欲が担い手としての関係人口の創出に重
要な役割を果たすことが示された。「プロジェクト
の進め方から学びを得た」という経験や、「地域活
動のロールモデルとしての Lab メンバーやファシ
リテーター」をみて学ぶ姿勢を代表的に、越境学
習のアウェイ状態において、何でも自らの学びに
しようという姿勢である。今回の調査結果からは、
上記の視野拡大とチャレンジ精神に、自己成長意
欲がセットになることで、より担い手の創出確率
が向上することがわかった。

(3) 主体性

主体性の要素が加わると、若干適合性がさがる
傾向がみられた。このことは、グループ分けされ
たメンバーの中で、リーダーシップを先にとった
人の性格や、課題解決への困難度が影響する可能
性がある。つまり、上下関係のない環境で、主体
性がどの程度発揮されるかは、チームの状況によ
って左右されやすいということである。これは一
方で、メンバーが主体性を発揮しやすい仕組みを
組み込むことで、より「担い手としての関係人口」
創出が促進される可能性が示唆された。

例えば、日本では役割が与えられるほど人々が
力を発揮する傾向にあるとされる。現在の Cx0Lab
ではプロジェクトのスタート期から役割分担自体
をメンバーの自発性に任せる場面が多くみられる。
本調査結果から考えると、この点についてはファ

シリテーターが早い段階で具体的な役割をメンバーに割り当てることで、各自がその役割において主体性を発揮しやすくなる可能性があると言える。

(4) まとめ

以上、担い手としての関係人口の創出には、「異質性」「抽象性」「上下関係のなさ」という越境学習環境の場を用意することが、自己成長意欲の高い参加者の視野拡大やチャレンジ精神、主体性を喚起し「担い手としての関係人口」の創出を促進する鍵であることが見えてきた。

(5) 本調査の課題と今後

本調査の課題は2つある。1つめは、調査対象が Cx0Lab 参加者に限定されていたためサンプル数が少ないことである。

2つめは、実際に担い手としての関係人口となるか否かは、本人の気持ちだけでなく、家族や仕事などの生活環境に大きく依存する。そのため、共通因子にさらに家庭環境やライフサイクルなどの外的要因を加える必要があり、それはかなりハードルが高い。

一方で、このようにサンプル数が少ない事例調査の場合、要因がどの程度説明可能かを数値で評価することには限界がある。そのため、主に外的環境を全体枠で評価し、心理的な要因は個別ヒアリングでサンプルを掘り下げることが望ましいと考えられる。

参考文献

- 1) 石山恒貴『越境的学習のメカニズム：実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像』福村出版, 2018.
- 2) 大谷博「「関係人口」へ取り組む地域」 徳島経済 Vol. 102, 2019.
- 3) 田中輝美『関係人口の社会学 人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会, 2021.
- 4) 田村正紀『経営事例の質的比較分析 スモールデータで因果を探る』白桃書房, 2015.
- 5) 中島ゆき「自治体における「関係人口」取組みの現状と課題—“熱狂的ファン戦略”モデルの一考察—」地域構想 Vol. 2, 2021.
- 6) 中島ゆき「関係人口は新たなフェーズに入ったか？—自治体の役割に着目して—」地方自治みえ第 355 号, 2022.
https://www.tais.ac.jp/guide/latest_news/20220221/75103/
- 7) 中島ゆき「担い手として関係人口創出の新しいしくみ —当事者意識を生み出す「仕様書」／塩尻市の事例—」長野県地方自治研究センター「信州自治研」(380), 7-17, 2023-10.

6. 今回の調査から見た新たな視点:コミュニティ結束力の重要性と今後の調査方向

今回の調査では越境学習の影響に焦点を当てたが、アンケート結果からは、越境学習以外にも Cx0Lab ならではの特徴が多く見いだされた。特に、「今まで知らなかった人たちとすぐに深い話をすることができた」「仲間として受け入れてくれる雰囲気スゴイ」「寛容的な環境」「自分自身のスキルが地域の役に立つ実感」「自己の価値観や方向性を再発見できた」といった自由回答が多く挙がった。これらの意見は、プロジェクトを運営する空気感や人間関係、参加しやすさを促進する仕掛けの必要性、すなわち Cx0Lab が持つ“コミュニティの結束力”に特徴があることを示す意見である。この Cx0Lab のコミュニティ結束力が参加者にとってのプロジェクトの価値を高め、継続的な関わりを促す重要な要因であることが示唆されている。

本調査の主眼以外に見えてきたこのコミュニティの結束力という点については、今後の調査でさらに深掘りし、Cx0Lab のような関係人口創出事業が持つ独自の要因を明らかにしていくことが重要である。これにより、今後、日本各地の関係人口創出事業のより効果的な「担い手としての関係人口」創出のアプローチが見えてくることを引き続き目指す。